

漢詩：文苑

著者	山内, 正瞭
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 5
ページ	5 3 - 5 5
発行年	1896-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/4893

死之致天下之平定、我北筑多士、與有力焉、當是時、一旦登藩大職、既盡其分、洒然早退、此
潔其跡者、翁爲第一。明治二十六年、聖恩優渥、及隱逸之士、授翁以從五位之榮、時翁八十、
方杖朝之年、而有如此之盛典、聞翁昔在藩老、軍事能舉、士風克興、猶梅花之取花魁也、今
則植杖耘耔、安延其年、猶菊花之占花殿也、而其健康、亦可以比南山終不動、早退喜青山、
翁俟靜山乎、靜山俟翁乎、山高氣靜、宛高陶靖節也、終寫舊作一絕、此呈於函丈、聊代祝詞
云。

寒夜煎茶

山內正瞭

嫩把殘書對短檠、數杯頑渚伴寒更、樹枯風死林窓靜、啼月驚鴉時一聲。

竹溪先生曰：寒夜情味、宛然如見、讀之使人肌生粟、

霜夜

清夜沈々萬籟虛、寒衾如鐵夢初蘇、滿庭霜白梅花月、寫出橫斜一幅圖。

竹溪先生曰：景有畫趣、詩有畫味、尤爲可誦、

探梅 次楊詩韻

探榫孤杖兼探奇、斜日晴暄酒醒時、危石斷橋奇絕處、香清竹外一枝々。

竹溪先生曰：即景即時、看他自在寫出、

偶作

小竹編成短々籬、對山臨水結茅茨、青苔半圃堆如積、滿眼風光都是時。

全

坂屏瓦屬竹編籬，野色山光綠四時。宜月宜風又宜雨，自然景物總成詩。

竹溪先生曰：縱筆肆意，恰到好處，後首珠妙。

前赤壁集字

月泛清江夕接空，虛舟如葉駕輕風。簫歌相和登仙樂，詩酒何知絕世雄。水色渺茫無上下，山光蒼鬱望西東。其[人]其容皆長逝，萬里浩波流不窮。

竹溪先生曰：才雄氣道，五六尤妙。

題畫（其一）

村遠人迹少，岸欹樹又傾。水聲與鳥語，日夜相和鳴。

（其二）

山光與水色，相映斜陽中。老楓被霜染，滿林鳥語紅。

竹溪先生曰：畫意畫題，是所謂有聲畫也。

春林曲塢（其三）

朝來春雨罷，草木盡生花。一樹垂楊綠，將藏萬點顰。

夏山過雨（其四）

夏雨山光秀，晚陽樹影長。孤亭無人倚，閑却滿欄涼。

江水秋晚（其五）

木葉經霜落，水光帶月流。物華千萬趣，高潔媚深秋。

寒窓幽逸(其六)

不、落、溪、水、澗、山、聳、岸、根、高、一、路、無、人、影、千、山、風、怒、號、

竹篔先生曰 首々皆輕情、夏山過雨一首殊推絶調、

偶 作

漸覺春來日脚長、輕風淡日自生光、小齋無事枕書睡、一縷沈烟夢亦香、

竹篔先生曰 後半才思生新、饒有姿致、

批 評

再び『文學上に於ける現時の國家主義』を讀む

(承前)

晚天窟主人

第三 國民的精神と文學と

知らず學人は何物にか驚怖せし。遽然語を爲して曰く、『予を以て國民的精神を排斥するものとする。何ぞ其語の妄にまて其語の無鐵砲なるや』と。余は此句を讀むで覺ゆる啞然たること久し。學人何の疚しき所あれば、斯くは的なきに矢を放つて自ら辯護せんとするぞ。あはれ何人が學人を以て國民的精神を排斥するものとせし。余ハ學人が文學上に於ける國民的精神を排斥するものなることを疑はざれども、未だ單に國民的精神を排斥する如き腐腸男子に非ざるを信せんと欲する也。

夫れ文學の國民的精神を欲ぐべからざるは、今更ら繰返して論ずる迄もなかるべし。されば眞に文學の發達を望むものは須らく先づ國民文學の勃興を望まざるべからず。學人前に於て國家と文學の合